

両親の離婚によって青年が経験する 「見捨てられ不安」要因の検討

三宅 涼・田中 秀紀¹

要旨

本研究では、子どもが見捨てられ経験と捉える両親の離婚の要因について明らかにすることを目的とした。調査1では、「両親、またはどちらかの親からの離婚についての説明」、「離婚後の離別親との面会」、「離婚後の同居親との交流」、「見捨てられ経験としての離婚の受け入れ」、「現在の見捨てられ不安」の関連について作成したモデル図の検討を行った。大学生213名を対象にアンケート調査を実施し、両親の離婚を経験した34名を分析対象とし、共分散構造分析を行った。結果、離別親との面会が見捨てられないための行動に負の影響を、見捨てられ経験と離婚についての説明、同居親との交流が他者の評価が気になるに正の影響を与えていることが示された。次に、調査2では両親の離婚を経験した29名の両親の離婚に関する自由記述をM-GTAを用いて分析した。結果、離別親や同居親、親族からの情緒的な支援により前向きな姿勢を示すプロセスが示唆された。また、両親の離婚に関する自身の気持ちを、自由記述という形で振り返ることによって、これまで気づかなかった自分の気持ちに気付くなど、回答者にとってカタルシス効果がもたらされたと考えられる。

キー・ワード：離婚、見捨てられ不安、情緒的支援

問題と目的

厚生労働省（2019）の調査によると、我が国の離婚件数は2002年の28万9836件をピークに減少傾向であるものの、2018年の離婚件数は20万8496組で、婚姻件数と離婚件数を対比させて算出した離婚率は約34.8%となる。また、親の離婚を経験する子どもの数も、出生数から考えると少なくないだろう。

Holmes & Rahe（1967）は、離婚は日常生活の中で経験する出来事の中で、配偶者の死に続いて2番目にストレスフルなライフイベントであるとした。しかし、離婚をした夫婦に子どもがいる場合、その子どもは両親の離婚によって心理的影響を受ける。実際に、両親の離婚を経験した子どもについて検討を行った研究の多くが、離婚家庭の子どもは非離婚家庭の子どもより心理的well-

beingが低いこと（武田・奈良，2015）など、両親の離婚による子どもの心理面へのネガティブな影響を報告している。

また、裁判所（2017）によると、離婚の申立ての動機は男女ともに性格が合わないことが最も多い。このように、両親の離婚の理由が両親間での問題であっても、離婚によってどちら一方の親が子どもと離れることは、子どもにとって、両親の離別親から自分が見捨てられた経験として捉える可能性がある。さらに、井合・根建（2013）は、見捨てられ経験を持つ者は、見捨てられ経験を持たない者よりも、見捨てられスキーマを測定するThe Abandonment Schema Questionnaire（以下、ASQ）の得点が高いことを示した。また、井合・矢澤・根建（2010）は、ASQの得点と見捨てられ不安の得点が有意に関連することを明らかにした。このことから、離婚を見捨てられ経験として捉えた子どもは、見捨てられ不安を抱える可能性が高いと考えられる。

¹ 中部大学人文学部

見捨てられ不安とは、DSM-5によれば、「現実には、または想像の中で、見捨てられることを避けようとするなりふり構わない努力」であり、境界性パーソナリティ障害の診断基準の一つである。斎藤・吉森・守谷（2012）は、見捨てられ不安の高さは対人関係の不安定と関連があることを明らかにしている。

野口・櫻井（2009）は、大学生を含む青年期における独身者、既婚者を含む成人期にある人を対象とし、グラウンテッド・セオリー・アプローチによる分析を用いて、親の離婚を経験した子どもの精神発達についての検討を行った。分析の結果、13のカテゴリーと60のサブ・カテゴリーが抽出され、そのうちの【親密性への恐れ】というカテゴリーを構成する「異性と親密になることの恐れ」というサブ・カテゴリーの中には、「もし、捨てられたらどうしようとか、嫌われたらどうしようとかっていう気持ちがあって、怖いですね。」といった見捨てられ不安を抱いた発言がみられた。また、曾山（2018）は、対人援助職の専門家98名を対象にアンケート調査を実施した結果、半数近くの援助者が離婚の相談を受ける経験や、離婚に関するテーマに触れる経験があることを明らかにした。この調査結果にも示されるように、離婚が珍しくない今日の日本において、離婚後の親と子どもの心理的な問題に対処するために、心理職による離婚家庭の支援の需要は高まっていると考えられる。そして、そのような支援においては、両親の離婚によって子どもが経験する見捨てられ不安のようなネガティブな影響を軽減することも重要となる。しかし、両親の離婚によって子どもが経験する見捨てられ不安を中心に考察を行っている研究はまだ少なく、見捨てられ不安が増減する要因を検討することがより良い支援につながると考えられる。

前述したように、両親の離婚という経験から子どもが見捨てられ不安を抱くのは、両親の離婚を離別親からの見捨てられ経験として捉えた場合であると考えられる。そのため、まずは「両親の離婚」を「見捨てられ経験」として捉える要因について明らかにする必要がある。この要因には、子どもの年齢や性別、子どもの性格や元々持つ適応能力など様々な影響が考えられる。しかし、本研

究においては、両親が離婚を決断してからでも、子どもに対するネガティブな影響を緩和させると考えられる「両親、またはどちらかの親からの離婚についての説明」と、「離婚後の離別親との面会」に焦点を当てる。

前者の「両親、またはどちらかの親からの離婚についての説明」に関連する先行研究において、棚瀬（2004）は、自身の経験した離婚家庭の子どもたちへのカウンセリング4事例の分析を通して離婚家庭の子どもたちの適応について考察した。その中で、離婚家庭の子どもたちが不適応状態に陥ってしまう悪条件として、「説明なしの突然の両親別居」を挙げている。また、Elissa（1995 高田訳 1999）は、親が子供に離婚の説明をしないことは無神経なことであると述べている。特に、「別居や離婚それ自体が子どもに害を与えるのではなく（中略）子どもの幸福は、親が離婚の後始末をどうするかにかかっている」、「親の別居や離婚という事態に子どもがうまく対応していくには、自分の親はあらゆることに慎重に取り組んでいる、と思えなくてはなりません」と、両親の離婚後における子どもの適応には、子どもに離婚の説明をすることが重要であると強調している。このように、離婚についての説明がないことは、子どもの不適応状態につながると考えられ、また、その不適応状態として、見捨てられ不安を抱くことが考えられる。

後者の、「離婚後の離別親との面会」に関して、これまでの研究から、離別親との面会の有無も子どもの心理に影響を与えることがわかっている。益子（2013）は、離婚後に親の意向で離別親と会えていない子どもは、自己評価や自己肯定感が低くなり、他者不信感を高く抱くことを明らかにした。また、高橋（2019）の一事例研究では、対象者の女性が社会人であった時に、両親が不仲を理由に離婚し父親と別居となったが、いつでも父親に会いに行けるという期待を持っていたため、両親の離婚によって親子の関係が途絶えたわけではないと認識し、主体的に物事に取り組むなど、離婚による肯定的な側面もみられた。このように、離婚後に離別親との面会が可能であることは、見捨てられ不安を軽減すると考えられる。反対に、

親の離婚時に子どもが同居親から離別親との面会を禁じられている場合や、自分で離別親に会いに行くことが出来ない年齢である場合には、より見捨てられ不安を抱くと考えられる。

離婚率の上昇とともに日本では、離婚が子どもに与える影響について研究されてきたが、その多くが事例研究であるため、縦断的研究や離婚を経験した子どもの一般的な傾向を探っていく量的研究が必要であるとされている（本多・遠藤・中釜, 2011）。よって、本研究では、子どもが見捨てられ経験と捉える両親の離婚の要因について、質的にだけでなく量的にも研究することを目的とした。

調査 1

目的

調査 1 では、質問紙を用いて、「両親、またはどちらかの親からの離婚についての説明」、「離婚後の離別親との面会」、「離婚後の同居親との交流」、「見捨てられ経験としての離婚の受け入れ」、「現在の見捨てられ不安」の関連について、モデル (Figure 1) の検証を行うことを目的とする。まず、両親、またはどちらかの親からの離婚についての説明は、見捨てられ経験としての離婚の受け入れに負の影響を与えると考えられる (パス a)。離婚後の離別親との面会は、見捨てられ経験としての離婚の受け入れに負の影響を与えると考えられる (パス b)。離婚後の同居親との交流は、見捨てられ経験としての離婚の受け入れに負の影響を与えると考えられる (パス c)。そして、見捨てられ経験としての離婚の受け入れは現在の見捨てられ不安

てられ不安に正の影響を与えると考えられる (パス d)。

方法

調査対象者 X 県の大学生 213 名 (男性 105 名, 女性 108 名, 平均年齢 19.4 歳, $SD=1.07$) を対象として Google フォーム によるアンケート調査を行った。そのうち、両親の離婚を経験した 34 名 (男性 17 名, 女性 17 名, 平均年齢 19.6 歳, $SD=1.06$) を分析対象とした。

調査項目 1) 両親の離婚を経験したか：現在両親が再婚しているかを問わず、一度は両親の離婚を経験しているかを問うために、「あなたは両親の離婚を経験していますか。ある／ないどちらかに○を付けてください。」という項目を独自に作成した。「ある」と答えた離婚群には、次の質問から回答するように、「ない」と答えた非離婚群には、「現在抱える見捨てられ不安」から回答するように設定した。

2) 両親の離婚を見捨てられ経験と捉えているか：両親の離婚を見捨てられた経験として捉えているかを調べるために、「両親が離婚してから、あなたは別居することになった父親または母親から『見捨てられた』と思ったことがありますか。ある／ないどちらかに○を付けてください。」という項目を独自に作成した。

3) 離婚前の両親からの離婚についての説明：離婚前に、両親から離婚についてのどの程度説明がされていたか測定するため、説明の量に関しては、「あなたの両親、またはどちらかの親は、離婚前

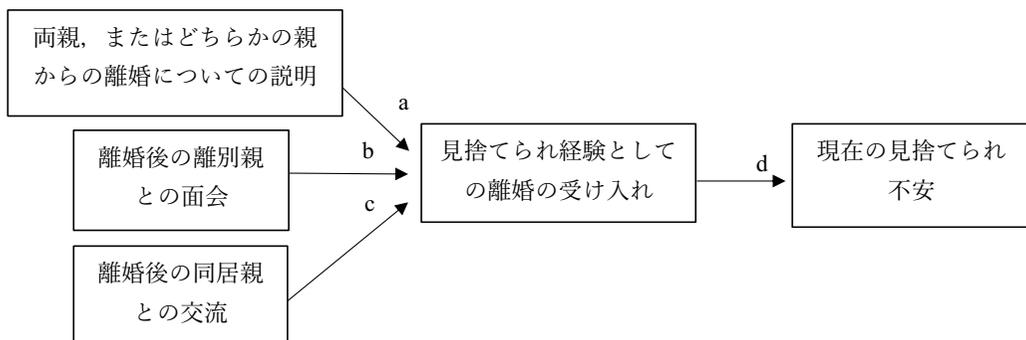


Figure 1. 本研究のモデル図。

や離婚後にあなたに対して離婚の説明をしましたか。最も当てはまる数字1つに○を付けてください。」と教示をし、各項目5件法（1：まったくしなかった～5：よくしていた）で回答を求めた。説明の質に関しては、「あなたの両親、またはどちらかの親からの離婚についての説明は納得できるものでしたか。最も当てはまる数字1つに○を付けてください。」と教示をし、各項目5件法（1：まったくあてはまらない～5：よくあてはまる）で回答を求めた。

4) 離婚後の離別親との面会の程度：離婚群の両親の離婚後における離別親との面会の程度について測定するために、直原・安藤（2020）による別居親（父）との交流実感尺度6項目を、別居親を父と限らず用いて、各項目5件法（1：まったくあてはまらない～5：よくあてはまる）で回答を求めた。

5) 離婚後の同居親との面会の程度：離婚群の両親の離婚後における同居親との交流の程度について測定するために、直原・安藤（2020）による別居親（父）との交流実感尺度6項目を、別居親を同居親と変更し、各項目5件法（1：まったくあてはまらない～5：よくあてはまる）で回答を求めた。

6) 両親の離婚に対しての思い：両親の離婚を当時、また現在どのように感じているのか調査するため、「両親の離婚当時のあなたは、両親の離婚をどのように体験し、どんな気持ちになりましたか。自由に記述してください。」「このアンケートにおけるこれまでの質問に回答をして、現在のあなたは両親の離婚を振り返ってみてどのように

感じましたか。何でも構いませんので感じたことを自由に記述してください。」という2つの自由回答欄への回答を任意で求めた。

7) 現在抱える見捨てられ不安：離婚群・非離婚群の現在抱える見捨てられ不安の程度を測定するために、斎藤・吉村・守谷ら（2012）による見捨てられ不安尺度15項目を用いて、各項目5件法（1：まったくあてはまらない～5：よくあてはまる）で回答を求めた。

8) フェイスシート：年齢、性別について尋ねた。

手続き 本調査はgoogleフォームによるアンケート調査を実施した。調査協力者には対面授業内でURLを印刷した調査協力依頼書を配布し、同意したものが回答した。

「あなたは両親の離婚を経験していますか。」という質問に「いいえ」と回答した場合にはすべての質問項目が表示され、「はい」と回答した場合には、現在抱える見捨てられ不安についての質問項目のみ表示されるように設定した。回答者には、回答後にデブリーフィングを行った。分析には、統計分析用プログラムHADを使用した。

結果

各尺度の主成分分析 1) 離婚後の離別親との面会の程度：離婚後の離別親との面会の程度の質問項目のうち、面会の質の測定を目的とした交流実感尺度6項目について、主成分分析を用いたところ、第1主成分が抽出された。第1主成分の寄与率は81.63%であった。結果をTable 1に示す。

Table 1
別居親との交流実感尺度の主成分分析結果

質問項目	Factor1	共通性
3. 別居親と過ごす時間がうれしかった	.95	.91
4. 別居親とは、おしゃべりや冗談を言い合って過ごした	.93	.86
2. 別居親からの愛情を肌で感じられた	.92	.85
5. 別居親は、私の好きなところに連れて行ってくれた	.89	.78
6. 別居親とは、共通の趣味や関心ごとを通して過ごした	.87	.76
1. 別居親との交流は、精神的な支えとなった	.86	.73
因子寄与		4.90

2) 離婚後の同居親との面会の程度：離婚後の同居親との交流の質の測定を目的とした交流実感尺度6項目について、主成分分析を用いたところ第1主成分に抽出された。第1主成分の寄与率は66.27%であった。結果をTable 2に示す。

3) 現在抱える見捨てられ不安：現在抱える見

捨てられ不安の測定を目的とした見捨てられ不安尺度15項目について最尤法プロマックス回転を用いて因子分析を行った。スクリープロットの傾きから二因子構造が妥当であると判断した。因子分析の結果から得られた因子パターンをTable 3に示す。第1因子は、「メールの返信が来ないと不

Table 2
同居親との交流実感尺度の主成分分析結果

質問項目	Factor1	共通性
3. 同居親と過ごす時間がうれしかった	.93	.86
4. 同居親とは、おしゃべりや冗談を言い合って過ごした	.89	.80
2. 同居親からの愛情を肌で感じられた	.86	.73
5. 同居親は、私の好きなところに連れて行ってくれた	.85	.72
6. 同居親とは、共通の趣味や関心ごとを通して過ごした	.69	.48
1. 同居親との交流は、精神的な支えとなった	.62	.39
因子寄与	3.98	

Table 3
現在の見捨てられ不安尺度の因子分析結果

質問項目	抽出因子		共通性
	F1	F2	
第1因子 見捨てられないための行動 ($\alpha = .90$)			
4. メール返信が来ないと不安になり、何度も相手に問い合わせをする。	1.02	-.13	.90
5. 自分に注目してほしいから、わざと気を引くような行動をする。	.92	.01	.85
3. 気持ちが不安になると、友達に自分の気持ちを大げさに話し、相談に乗ってもらう。	.69	.15	.62
8. 相手の気を引くために、何度も電話をして着信履歴を残す。	.65	-.06	.38
14. 本当は好きな友人でも、周囲がその友人の悪口を言っていたら一緒になって悪口を言ってしまう。	.64	-.02	.40
6. 別の友人と先約があるのに、目の前の友人に嫌われたくないため、目の前の友人の誘いを優先してしまう。	.61	.20	.56
第2因子 他者からの自分に対する気持ち・評価が気になる ($\alpha = .85$)			
12. 周りに良く思われたいため「いい人」を演じてしまう。	-.15	.99	.82
7. 自分の振る舞いが友人から変に思われないか、気にしている。	-.13	.84	.60
15. 自分のスケジュールを犠牲にしても、他人からの新しい依頼を断れない。	-.09	.72	.44
9. 周りにどう思われているかを気にして、本当の自分を出せずにいる。	.22	.62	.58
2. 気がかりなことがあると、誰かに気付いて欲しくてブログやメールに自分の気持ちを書いて公表する。	.30	.56	.60
11. 友人が不機嫌そうなときは、自分が原因ではないかと不安になる。	.24	.47	.41
1. 自分にとって特別な存在であることを大切な人にアピールする。	.13	.38	.22
13. 自分が誘われていない集まりがあると嫌われているのではないかと不安になる。	.17	.36	.24
10. 自分の嫌いな人にも嫌われたくないと思う。	.09	.32	.15
因子間相関	5.41	5.23	

安になり、何度も相手に問い合わせをする」や「自分に注目してほしいから、わざと気を引くような行動をする」、「気持ちが不安になると、友達に自分の気持ちを大げさに話し、相談に乗ってもらう」など、不安な気持ちから引き起こされる行動を示す項目が高い因子負荷量を示したため、「見捨てられないための行動」因子と名付けた。第二因子は「自分の振る舞いが友人から変に思われぬか、気にしている」や「周りにどう思われているかを気にして、本当の自分を出せずにいる」、「友人が不機嫌そうなときは、自分が原因ではないかと不安になる」など、周りからの評価が気になることによって抱える不安を示す項目が比較的高い因子負荷量を示したため、「他者からの自分に対する気持ち・評価が気になる」因子と名付けた。

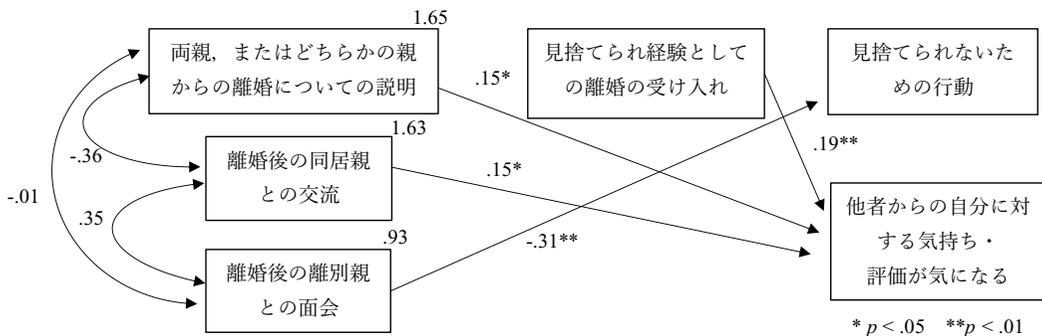
各項目の共分散構造分析 「両親、またはどちらかの親からの離婚についての説明」、「離婚後の離別親との面会」、「離婚後の同居親との交流」、「見捨てられ経験としての離婚の受け入れ」、そして因子分析の結果抽出された「見捨てられないための行動」と「他者からの自分に対する気持ち・評価が気になる」あらかじめ設定したモデルをもとに共分散構造分析を行った。結果、Figure 2のモデル図に適合性が認められた ($\chi^2(7)=5.46$, CFI=.1.00, RMSEA=.00, GFI=.95, AGFI=.86) (外生変数の右肩の数値は分散の推定値を示す)。「離婚後の離別親との面会」は、「見捨てられないための行動」に1%水準で有意な負の影響を与え、「見捨てられ経験としての離婚の受け入れ」は「他者からの自分に対する気持ち・評価が

気になる」に1%水準で有意な正の影響を与えていることが示された。また、「両親、またはどちらかの親からの離婚についての説明」は「他者からの自分に対する気持ち・評価が気になる」に、「離婚後の同居親との交流」は「他者からの自分に対する気持ち・評価が気になる」に5%水準で有意な正の影響を与えていることが示された。

考察

本研究の目的は、「両親、またはどちらかの親からの離婚についての説明」、「離婚後の離別親との面会」、「離婚後の同居親との交流」「見捨てられ経験としての離婚の受け入れ」、「現在の見捨てられ不安」の関連について、モデルの検証を行うことであった。共分散構造分析の結果、仮説の一部は支持され、新たなモデル図が作成された。

因子分析の結果、「現在の見捨てられ不安」は、「他者からの自分に対する気持ち・評価が気になる」と「見捨てられないための行動」の二因子に分けられた。次に、共分散構造分析の結果、「離婚後の離別親との交流」は、「見捨てられないための行動」に1%水準で有意な負の影響を与えると示された。本研究では交流実感尺度を用いて、離別親との面会の質を評価したが、量的にそもそも面会交流が行われなかったことについても、自由記述欄への回答から予測できる。そして、直原・安藤(2022a)が、同居親が母親の場合の面会交流の未実施の原因として「養育費不払」を挙げ、この「養育費不払」は、母親の元夫への怒りを高め、信頼の再構築と社会的価値を低下させるといった、母親の心理的適応の良好さを低下させる可能



性を示唆しているように、面会交流などの「離婚後の離別親との交流」を同居親が実施させないような、離別親側の要因が同居親の心理的適応を低下させ、そのような同居親の心理的適応の低下が、子どもへの好ましくない養育態度に関連した結果、子どもの「見捨てられないための行動」を強化させると考えられる。両親の離婚後、子どもにとって頼ることのできる存在は同居親一人に限られることが多く、その同居親との交流も乏しい場合には、離別親と同じように同居親が自分から離れていってしまう不安から、同居親の顔色を過度に伺いながら生活するなどの、見捨てられないための行動に移行すると考えられる。

次に、「見捨てられ経験としての離婚の受け入れ」は「他者からの自分に対する気持ち・評価が気になる」に1%水準で有意な正の影響を与えていることが示された。先に挙げた井合・根建(2013)の研究において、見捨てられスキーマを測定するために用いられた、ASQは、見捨てられることに関する認知的枠組みを測定しているため、本研究の「現在の見捨てられ不安」のうち、「見捨てられないための行動」より、「他者からの自分に対する気持ち・評価が気になる」の方が適していると考えられる。よって、この結果は、井合・根建(2013)の、見捨てられ経験を持つ者は、見捨てられ経験を持たない者よりも、見捨てられスキーマを測定するASQの得点が高いという結果を支持すると考えられる。

また、「両親、またはどちらかの親からの離婚についての説明」は「他者からの自分に対する気持ち・評価が気になる」に1%水準で有意な正の影響を与えていることが示された。直原・安藤(2022b)は、同居親が母親である場合、「離婚に対する母親からの説明等実感」は、「母の情緒的サポート」との間に中程度の正の相関、「母の情緒的サポート」は、子どもが評価した適応との間に中程度の正の関連を示したが、「離婚に対する父親からの説明等実感」は、「葛藤に対するネガティブ感情」との間に中程度の正の相関、「葛藤に対するネガティブ感情」は「自己非難・子どもらしさの棄却」とやや弱い正の相関が認められた。このように直原・安藤(2022b)は説明をした親

が母親(同居親)であるか、父親(別居親)であるか区別し、またそれぞれの場合で結果が大きく異なっているが、本研究での「両親、またはどちらかの親からの離婚についての説明」について問う項目は、別居親からの説明と同居親との説明を区別しなかったため、どちらからの説明が多かったかについては不明である。また、本研究における両親の離婚を経験した回答者の約半数が、乳児期や幼児期に両親の離婚を経験しており、自由記述欄への回答でも7名が「覚えていない」や「記憶にない」等記述している。これらの理由により、この結果は適切ではないと考えられるため考察を控える。

「離婚後の同居親との交流」は「他者からの自分に対する気持ち・評価が気になる」に5%水準で有意な正の影響を与えていることが示された。両親の離婚そのものは、子どもなりに構築してきた関係性が、愛着形成の基礎となった両親によって破壊されるため、ショック体験は根強いと推察される。そして、子どもにこれから自身が築いていく関係性も崩壊してしまうという不安を喚起させると考えられる。よって、離婚後の同居親との交流の質がよければよいほど、また見捨てられるのではないかと、裏切られるのではないかとといった不安が高まる可能性や、見捨てられないように質の良い関係を維持するための努力をしている可能性も考えられる。山田・岡本(2007)は、「自己への信頼感・効力感」「将来展望」「自律性」といった「個」としてのアイデンティティ、「自己を取り巻く世界への信頼感と関係性の価値づけ」「他者との適度な距離感」「関係の中での自己の定位」といった「関係性」に基づくアイデンティティの両者が低い未熟群は、対人関係上の困難への対処の仕方として「他者の援助」を求めること、「努力」することを選択せず、「回避」や「諦め」を選択することを示し、解決に向かう対処方法を取ることが難しいと考えた。同居親との交流の質が悪い子どもは先に述べたように、自己効力感の低さや将来展望の低さがみられ、他者との距離感に関する感覚も乏しいと考えられるため、この先行研究における未熟群に当てはまると考えられる。したがって、同居親との交流の質が悪い場合には、

子どもには考えることへの回避や、関係性への諦めといった感情が先行することが考えられる。本研究において、同居親との交流の質が正の影響を与えた変数が、見捨てられ不安のうち、不安な気持ちであった結果も、このような理由から説明できると考えられる。

調査 2

目的

調査 1 では、両親の離婚そのものや、その後の子どもへのフォローアップの在り方によって子どもの見捨てられ不安が高まる等様々な可能性が示された。久保野・棚村・藤本 (2021) によると、両親の離婚について、子どもが誰かに相談したのは 9.4% であり、46.5% は相談したいことはあったものの相談しなかったことが示された。このように両親の離婚を経験した子どもの約半数が、誰かに相談したい両親の離婚についての悩みを抱えているが、具体的な悩みや心理的体験過程について調査した研究は少ない。

そこで調査 2 では、両親の離婚を経験した子どもが求める支援の示唆を得るため、子どもの両親の離婚に関する苦悩や困り感、また両親の離婚の影響を大学生になった現在振り返ってどのように感じるかを質的に調査することを目的とした。

方法

調査対象者 調査 1 にてアンケート調査を行った X 県の大学生 213 名のうち、自由回答欄に回答した 35 名中 29 名 (男性 15 名, 女性 14 名, 平均年齢 19.6 歳, $SD=1.10$) を対象とした。

調査項目 1) 両親の離婚当時の気持ち: 両親の離婚当時に、回答者がどのように両親の離婚という出来事を受け取ったのか、どのような感情を抱いたのか等を問うために、「両親の離婚当時のあなたは、両親の離婚をどのように体験し、どんな気持ちになりましたか。自由に記述してください。」という自由回答欄を設けた。回答は任意であるとした。

2) 現在、両親の離婚を振り返りどう感じるか:

現在、アンケート調査によって両親の離婚を振り返ってみて、どのように両親の離婚について考えたか、感じたか等を問うために、「このアンケートにおけるこれまでの質問に回答をして、現在のあなたは両親の離婚を振り返ってみてどのように感じましたか。何でも構いませんので感じたことを自由に記述してください。」という自由回答欄を設けた。回答は任意であるとした。

手続き 本調査は google フォームによるアンケート調査を実施した。調査協力者には対面授業内で URL を印刷した調査協力依頼書を配布し、回答を求めた。

「あなたは両親の離婚を経験していますか。」という質問に「いいえ」と回答した場合にはすべての質問項目が表示され、「はい」と回答した場合には、現在抱える見捨てられ不安についての質問項目のみ表示されるように設定した。修正版グラウンテッド・セオリー・アプローチ (以下; M-GTA) を用いて質的研究を行った。回答者の一覧を Table 4 に示した。

結果

生成された概念とその定義 M-GTA による分析の結果、6 個の大カテゴリーと 13 個のカテゴリーが生成された (Table 5)。以下、大カテゴリーは《 》、カテゴリーは < >、概念は【 】を用いて表す。1) 大カテゴリー I 《離婚当時の状況》: 大カテゴリーでは、回答者が両親の離婚当時の状況について、自身がどのように理解したのかに関する 2 個のカテゴリーが集まった。カテゴリー ① <離婚について知らされていなかった> は、離婚について、両親からの説明がなかった。または、両親が離婚を子どもに隠していたことを示す。カテゴリー ② <離婚についての記憶がない> は、回答者が幼かったため、離婚当時の記憶がないことを示す。

2) 大カテゴリー II 《離別親に対するネガティブな気持ち》: 大カテゴリーでは、回答者が両親の離婚当時や離婚後に、離別親に対して抱いたネガティブな気持ちに関する 2 個のカテゴリーが集

Table 4
回答者のプロフィール

	年齢	性別	両親の離婚を何年前経験したか
A	21歳	女性	17年前
B	21歳	男性	19年前
C	21歳	女性	20年前
D	21歳	女性	20年前
E	20歳	男性	6年前
F	19歳	女性	5年前
G	21歳	女性	15年前
H	19歳	男性	4年前
I	20歳	女性	18年前
J	19歳	女性	8年前
K	19歳	男性	2年前
L	21歳	男性	6年前
M	20歳	女性	18年前
N	19歳	女性	5年前
O	20歳	女性	10年前
P	19歳	男性	3年前
Q	19歳	女性	3年前
R	18歳	男性	12年前
S	21歳	男性	4年前
T	20歳	女性	17年前
U	20歳	女性	1年前（現在離婚手続き中）
V	18歳	男性	10年前
W	21歳	男性	17年前
X	18歳	男性	16年前
Y	18歳	男性	12年前
Z	20歳	女性	14, 15年前
AA	20歳	男性	15年前
AB	18歳	男性	15年前
AC	18歳	男性	4年前

まった。カテゴリ③<離婚の原因が離別親の落ち度であった>は、飲酒や暴力など、離別親の落ち度が離婚の原因であり、その原因について同居親からの説明などによって知らされたことを示す。カテゴリ④<離別親がいない方が幸せであると感じる>は、離婚前の家庭状況と現在の家庭状況を比較、または想像して、現在の方が幸せであると感じていることを示す。カテゴリ⑤<離別親との面会に対する違和感>は、現在も離別親との面会に機会が設けられているが、あまり乗り気になれない気持ちや、苦痛であると示す。

3) 大カテゴリⅢ《離婚後のネガティブな反応》：大カテゴリでは、回答者が両親の離婚当時から離婚後にかけて感じた、離婚によるネガティ

ブな反応に関する2個のカテゴリーが集まった。カテゴリ⑥<離婚に対するショック>は、回答者が両親の離婚後に感じた、どちらかの親と離れ離れになることに対する悲しみや、そこから生じる行動に関する2個の概念を含む。概念【離婚を悲しく思った】は、どちらかの親との別れが悲しくて泣いてしまった感情体験などを示す。概念【離婚について同居親を責める】は、どちらかの親との別れを悲しみ、離婚したことについて同居親を責めた体験を示す。カテゴリ⑦<離婚による苦悩>は、両親の離婚当時や離婚後に、離婚と関係する出来事に関して回答者が味わった苦しみに関する3個の概念を含む。概念【両親間や親戚間での板挟み状態】は、両親に離婚しても良いのか選択を迫られた経験や、離婚後に親戚から離別親の悪口を聞かされた経験による苦痛を示す。概念【罪悪感】は、両親から離婚の原因などについての説明がなく、離婚は自分のせいだと思ひ込み、自分を責めた経験を示す。概念【自分が生まれてきた意味を考える】は、離婚により、離別親と離れ離れになることを、離別親からの見捨てられと解釈した経験を示す。

4) 大カテゴリⅣ《離婚の受容》：大カテゴリでは、両親の離婚が自分にとって良いものであったと思う気持ちに関する2個のカテゴリーが集まった。カテゴリ⑧<離婚に対する納得>は、両親の離婚後の、同居親からの離婚についての説明や自身の経験から、なぜ両親が離婚をしたのか理解し、納得する経験に関する3個の概念を含む。概念【同居親の説明による納得】は、離婚後に、同居親からの離婚の原因に関する説明があり納得した、または愛を感じた経験を示す。概念【離婚は良いものであったと思う】は、回答者が離別親にネガティブな感情を抱いているか否かに関わらず、両親の離婚は良いものであったと示す。しかし、この概念を構成する回答の中には、諦めとも捉えられる記述もいくつかみられた。概念【離別親の欠点に気付く】は、離別親との面会によって離別親の欠点に気付いた経験や、反対に、会うことがなくなることによって客観的に、ひどい人であったと感じた経験を示す。カテゴリ⑨<離婚の経験によって周りに感謝する気

Table 5
生成された概念と定義

大カテゴリー名	カテゴリー名	概念名	ヴァリエーション
離婚当時の状況	離婚について知らされていなかった		・「両親は私に離婚していることを悟られないように毎週のように両親そろってお出かけ出来ていたので幸せでした」(A)
			・「全く説明がなく、急に片親になってしまった」(AA)
離婚当時の状況	離婚についての記憶がない		・「物心つく前に離婚が成立していたため離婚時の記憶はありません」(B)
			・「自分が生まれてすぐの離婚で記憶に無い」(C)
ネガティブな気持ちに対する	離婚の原因が離別親の落ち度であった		・「2歳になる前だったので記憶がない」(M)
			・「保育園にも入学する前だったので特に記憶にありません」(T)
			・「私はまだ二歳だったためよく覚えていない」(X)
ネガティブな気持ちに対する	離別親がいない方が幸せであると感じる		・「当時は5歳だったのであまり覚えていない」(W)
			・「自分がまだ幼い頃に離婚したので全く記憶がないです」(AB)
			・「父親の飲酒によるDVが原因で離婚した」(I)
ネガティブな気持ちに対する	離別親との面会に対する違和感		・「私の両親は、浮気による離婚でした」(N)
			・「父の暴力が原因だった」(Q)
			・「父が私が幼い頃から全く家事に関与せず、母の我慢の限界が来て離婚が決まりました」(U)
離婚後のネガティブな反応	シヨツクに	離婚を悲しく思った	・「もともと私にとっての親は母親のみであったから。(中略)母と妹と3人で暮らしているほうがだいぶ幸せである」(F)
			・「父親の方は私のことが嫌いだったようなので一緒に暮らしていたら大変だったと思います」(X)
			・「年に2回くらい会うけど父親っていうより親戚の人みたいな感覚なので結構気を遣う」(M)
離婚後のネガティブな反応	シヨツクに	離婚について同居親を責める	・「離婚親と会うのは心の支えとかではなく、むしろ苦痛でした」(Q)
			・「その時はとても悲しくて、泣いたりもしました」(E)
			・「両親の離婚自体は悲しかった」(N)
離婚後のネガティブな反応	離婚による苦悩	両親間や親戚間での板挟み状態	・「最初は悲しかった」(S)
			・「大好きなお父さんとなんで離婚したのか強く母を責めてしまった」(A)
			・「今では親に離婚について責めるようなことはしなくなった」(H)
離婚後のネガティブな反応	離婚による苦悩	罪悪感	・「両親の離婚当時は母と父どちらがいいかと言う選択で決められました」(J)
			・「突然母親や母方の親戚から『あなたの父親は最低な人間である』と繰り返し言われたことは、怖かった」(N)
			・「どちらの話も聞いて、どちらも傷つけないように気を遣い、板挟みにされている(中略)祖母からは、『お前のところの家はどうなってるんだ』と責められ」(U)
離婚後のネガティブな反応	離婚による苦悩	自分が生まれてきた意味を考える	・「どっちの話も聞いて、どちらも傷つけないように気を遣い、板挟みにされている(中略)祖母からは、『お前のところの家はどうなってるんだ』と責められ」(U)
			・「実際に私が離婚してほしくないと言ったとしても状況は変わらないと思うけれど、当時は自分のせいで親が離婚したんだと自分を責めていました」(R)
			・「自分が寮生活をしていたため、お金がかかり余計に家庭環境を悪くしてしまったのか?と感じた」(S)
離婚後のネガティブな反応	離婚による苦悩	自分が生まれてきた意味を考える	・「私を引き取る際、父親側は「暴力を振るわないという保証はないし、最悪施設に入れるかもしれない」という話が出たために母親側に引き取られたらしいのだが、望んで生まれた子では無かったのかという気持ちになった」(I)

持ち>は、両親の離婚後に感じた、同居親への感謝や、両親のありがたさの実感などに関する2個の概念を含む。概念【同居親に感謝する気持ち】は、離婚後に一人で自分を育ててくれた同居親へ

の感謝を示す。概念【両親に感謝する気持ち】は、離別親と離れ離れになることによって、離別親がいることのありがたさを実感する感情体験や、現在も続く両親からのサポートに感謝する気持ちを

Table 5
生成された概念と定義（続き）

大カテゴリー名	カテゴリー名	概念名	ヴァリエーション
前向きな姿勢	離婚に対する納得	同居親の説明による納得	<ul style="list-style-type: none"> 「私を守るためにしょうがなく離婚を決意した話を聞いて愛を感じました」(A) 「母からなんで離婚したかの説明を聞いてからは別れて良かったと感じている」(W)
		離婚は良いものであったと思う	<ul style="list-style-type: none"> 「親の離婚(中略)は母親にとっても自分にとっても良いものだったと思います」(B) 「本当に父と母が離婚してよかったと思っている」(F) 「離婚をしてよかったのではないかと考えています」(X) 「両親が離婚をしていなく、父親に圧をかけられながら暮らしていくぐらいならむしろ親が離婚していて良かったなと自分は感じます」(AB) 「二人が決めたことならいいのではないかと思います」(AC)
		離別親の欠点に気付く	<ul style="list-style-type: none"> 「大人になるにつれて元父親の人格がよく分かるようになり人として欠点が多い人だと感じました」(B) 「父親に会わなくなって、私の中では他人と同等な存在になってからやっと、客観的に見て「ひどい人間だったな」と思うようになりました」(N)
	感謝する気持ち	同居親に感謝する気持ち	<ul style="list-style-type: none"> 「母親も毎朝早く仕事に出かけ夜遅く帰ってきて自分と弟は私立なのでお金がかかっていると思うのに何不自由ない生活を送らせてくれました」(E) 「母親に感謝」(V)
		両親に感謝する気持ち	<ul style="list-style-type: none"> 「父親、母親のありがたさをさらに感じることができました」(E) 「両親のおかげで今も不自由なく暮らせている感謝しています」(AC)
	情緒的な援助	両親以外のサポート	<ul style="list-style-type: none"> 「祖父母が近くに住んでいて、わたしの世話をしてくれていたのに特に寂しさなどを感じることもなく」(T) 「親が母親一人な分、母型の祖父母にも頻繁に会うことができ、お世話になったのでより愛されて優しく育ててもらったと思います」(AB)
離別親との十分な面会の機会		<ul style="list-style-type: none"> 「離婚後も定期的に父親と会ってとても特別な存在になりました。会うことができなかつたら精神的にやられていたんじゃないかなと思います」(E) 「自分は両親にいつでも会えるから」(AC) 	
アンケートの回答の効果	自身の特性に対する理解	<ul style="list-style-type: none"> 「学生時代は特に意識する事はありませんでしたが、社会人になり目上の男性(上司等)と接する際に、どう対応して良いのか分からなくなるときがある。(中略) 今回のアンケートを通して、父親(目上の男性)と全く関わる事が無い環境で育ったのが上記に述べた事象の原因の1つでは無いかと思った」(C) 「改めて考えると急に片親になってしまったことに悲しんでない自分に驚いた」(AA) 	
	気持ちの整理ができた	<ul style="list-style-type: none"> 「今まで少しだけ心にモヤモヤがあり、親や親戚には言えてなかった気持ちもありました。しかし、今回のアンケートで初めてすべての気持ちを文字で表してみても、少し心がすっきりとした気がしました」(N) 「思っていることを文字に起こし、整理できたため自分の気持ちは少し軽くなったように思います」(U) 	

示す。

5) 大カテゴリーV《情緒的な援助》：大カテゴリーでは、回答者が両親の離婚後に受けた情緒的な援助に関する2個のカテゴリーが集まった。

カテゴリー⑩<両親以外からのサポート>には、両親の離婚後に、親戚からの情緒的なサポートなどがあり、そのサポートに感謝する気持ちを示す具体例が集まった。カテゴリー⑪<離別親との十

分な面会の機会>には、両親の離婚後も離別親との面会の機会が十分に設けられていることを示す具体例が集まった。

6) カテゴリーVI《アンケートに回答することの効果》：本カテゴリーには、本研究の質問紙、特に自由回答欄への記述によって回答者にもたらされた効果に関する2個のカテゴリーが集まった。カテゴリー⑫<自身の特性に対する理解>は、自身の男性への人見知りを、両親の離婚経験と結びつけて考えるきっかけとなるなど、アンケートへの回答によって自分の特性について理解する効果を示す。カテゴリー⑬<気持ちの整理ができた>は、回答者が、両親の離婚に関してネガティブな感情を抱いている場合、自由回答欄にその気持ちを記述することによって気持ちが整理できる、または心がすっきりするような効果を示す。

ストーリーライン 上記した大カテゴリー、カテゴリーを基に、両親の離婚を経験した子どもの心理的体験過程を示すモデルを作成した(Figure 3)。このモデルをもとに、以下に両親の離婚を経験した子どもの心理的体験過程を記述する。

<離婚についての記憶がない>ことによって、面会時に離別親に気を遣ってしまうといった、<離別親との面会に対する違和感>を覚えるなど、《離婚当時の状況》が《離別親に対するネガティ

ブな気持ち》を発生させる。また、<離婚について知らされていないなかった>ため、離婚が悲しく、【離婚について同居親を責める】や、説明がなかったため、離婚の原因が自分にあると思ひ込み、【罪悪感】を抱くなど、《離婚当時の状況》は子どもに<離婚に対するショック>や<離婚による苦悩>を引き起こす。<離婚に対する納得>や<離婚の経験によって周りに感謝する気持ち>を含む《離婚の受容》に至るには3つのプロセスがあり、一つ目は、離婚前に離別親から暴力を振るわれていたなど、《離婚当時の状況》において、もともと《離別親に対するネガティブな気持ち》を持っている場合は、離婚して良かったと思うような【離婚に対する納得】を生じさせる。二つ目は、<離婚によるショック>や<離婚による苦悩>など、《離婚後のネガティブな反応》があった場合にも、<離別親との十分な面会の機会>や<両親以外のサポート>など《情緒的な援助》がある場合には、《離婚後の受容》を生じさせる。三つめは、《情緒的な援助》がない場合でも、《離婚後のネガティブな反応》を乗り越えて、《離婚の受容》に至る場合がある。このすべての過程を語り、振り返ることによって、《アンケートに回答することの効果》が生まれ、自分自身の気持ちの整理や理解になることが示された。

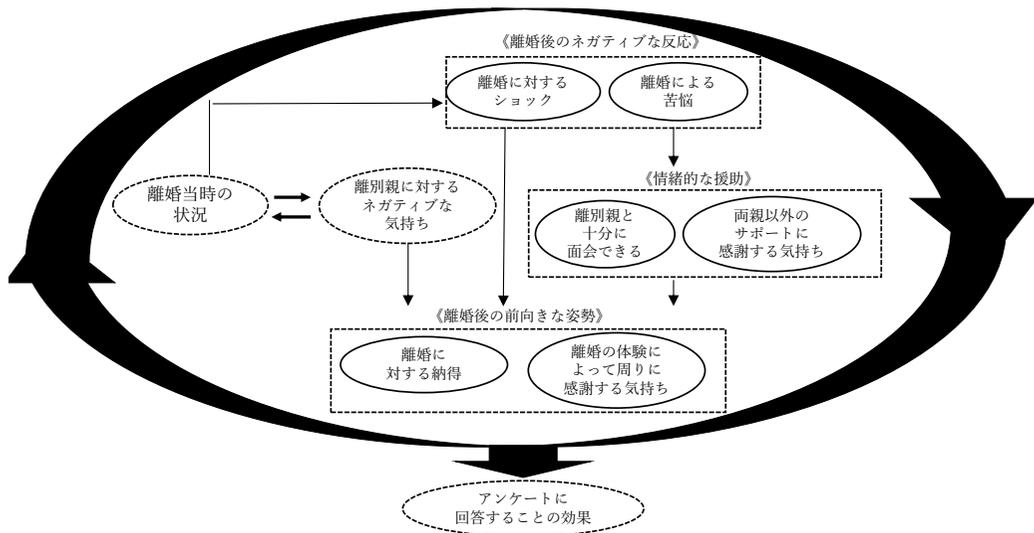


Figure 3. 両親の離婚を経験した子どもの心理的体験過程を示すモデル。

考 察

「両親の離婚当時のあなたは、両親の離婚をどのように体験し、どんな気持ちになりましたか。自由に記述してください。」と「このアンケートにおけるこれまでの質問に回答をして、現在のあなたは両親の離婚を振り返ってみてどのように感じましたか。何でも構いませんので感じたことを自由に記述してください。」という2つの自由回答欄への回答を、M-GTAを用いて分析した結果、両親の離婚を経験した子どもの心理的体験過程が示唆された。

特に、本研究でいくつかみられた記述である、両親の離婚に対して子どもが抱える【罪悪感】について、小田切・町田（2020）は、親同士が対立していると子どもは「どちらかの味方にならなければならない」と感じ、一方の親と楽しく過ごしているときにはもう一方の親を裏切っているような気持ちになると述べており、支援にはこのような子どもの忠誠葛藤の理解も必要となる。

また、《離婚後のネガティブな反応》から《情緒的な援助》の有無にかかわらず《離婚の受容》に至るまでのプロセスについて、教示文に具体的な指示がなかったため、実際に他者からの情緒的な援助を受けていたが記述はしなかった回答者もいると考えられる。よって、実際に離婚を受容するために情緒的な援助が必要であるか明らかでない。また、情緒的な援助が必要な場合はどのような関わりがもとめられるのか、情緒的な援助がない場合でも、本人が苦悩をどのようにして乗り越えたか、回答の中にいくつかみられた、諦めと捉えられる記述はどのようなプロセスをたどるのかを明らかにすることは、両親の離婚後における心理師等による子どもの支援に役に立つと考えられる。

また、両親の離婚当時の自身の気持ちを、自由回答欄への回答という形で振り返ることによって、モヤモヤとした気持ちの整理や、これまで気づかなかった自分の気持ちに気付くきっかけとなるなど、回答者にとってカタルシス効果のような効果ももたらされたと考えられる。

総合考察

研究1と研究2により、両親の離婚を経験した子どもは、最初は両親の離婚という出来事自体や、その後のフォローアップの在り方によって、罪悪感、同居親を責める、またその後の子どもの見捨てられ不安を高めるなどのネガティブな影響が生じることが推測された。しかし、その後の周りからの情緒的支援によって立ち直るプロセスが示され、離婚家庭の子どもを対象とする心理職による支援の可能性が確認された。具体的な支援内容については、子どもが両親の離婚の原因は自分にあると思うことによって感じる罪悪感や、忠誠葛藤の理解などが挙げられる。

今後の課題

本研究における自由回答欄は、両親の離婚当時と現在の回答者の気持ちについて尋ねるといった漠然とした内容であったため、回答者の内面を表した回答を十分に得られなかったと考えられる。

よって今後研究を行う場合は、「両親の離婚当時や離婚後に、両親や親戚から情緒的な援助があったか。またあった場合、それはどのようなものであったか。」や「両親の離婚という出来事に対してネガティブな感情を抱いたか。また抱いた場合、どのようにして乗り越えたか。」という質問項目を含めた自由回答欄を作成することが必要であると思われる。

付 記

本研究は、2021年度に中部大学人文学部心理学科に提出した卒業論文を加筆・修正したものである。

引用文献

American Psychiatric Association (2013).
Diagnostic and statistical manual of
disorder fifth edition. American
Psychiatric Publishing: Washington, DC.

- (米国精神医学会 日本精神神経学会 (監修) 高橋 三郎・大野 裕 (監訳) (2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- Elissa, P. B. & Catherine, F. B. (1995). How to Help Your Child Overcome Your Divorce. New York: Amer Psychiatric Pub Inc.
- (イリサ, P. B. & キャサリン, F. B. 高田 裕子 (訳) (1999). 離婚しても子どもを幸せにする方法 日本評論社)
- Holmes, T. H. & Rahe, R. H. (1967). The social readjustment rating scale. *Journal of Psychosomatic Research*, 11, 213-218.
- 井合 真海子・矢澤 美香子・根建 金男 (2010). 見捨てられスキーマが境界性パーソナリティ周辺群の徴候に及ぼす影響 パーソナリティ研究, 19, 81-93.
- 井合 真海子・根建 金男 (2013). 見捨てられ場面における見捨てられスキーマと思考・感情・行動との関連 行動医学研究, 19, 83-92.
- 本多 麻希子・遠藤 麻貴子・中签 洋子 (2011). 離婚が子どもと家族に及ぼす影響について——援助実践を視野に入れた文献研究—— 東京大学大学院教育学研究科紀要 51, 269-286.
- 久保野 恵美子・棚村 政行・藤本 亮 (2021). 未成年期に父母の離婚を経験した子の養育に関する実態についての調査・分析業務 報告書 公益社団法人商事法務研究会
- 厚生労働省 (2019). 令和元年 (2019) 人口動態統計 (確定数) の概況 https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei19/dl/02_kek.pdf (2020年9月17日)
- 益子 行弘 (2013). 親の離婚が子どもの心理に与える影響 感情心理学研究, 20, 7.
- 直原 康光・安藤 智子 (2020). 別居・離婚後の父母葛藤・父母協力と子どもの心理的苦痛, 適応等との関連 : 児童期から思春期に親の別居・離婚を経験した者を対象とした回顧研究 発達心理学研究, 31, 12-25.
- 直原 康光・安藤 智子 (2022a). 面会交流実施の関連要因および母親の面会交流の受けとめ等と心理的適応との関連 心理学研究, 93, 188-197.
- 直原 康光・安藤 智子 (2022b). 離婚後の父母コンペアレティングと子どもの心理的苦痛, 適応等との関連——別居後面会交流を実施していた児童期後半から思春期の子どもと母親の親子対応データを用いた検討—— 教育心理学研究, 70, 163-177.
- 野口 康彦・櫻井 しのぶ (2009). 親の離婚を経験した子どもの精神発達に関する質的研究——親密性への怖れを中心に—— 三重看護学誌, 11, 9-17.
- 小田切 紀子・町田 隆司 (2020). 離婚と面会交流——子どもに寄りそう制度と支援 金剛出版
- 斎藤 富由起・吉森 丹衣子・守谷 賢二・吉田 梨乃・小野 淳 (2012). 青年期における見捨てられ不安尺度開発の試み その1 ——社会構造の変化を重視して—— 千里金蘭大学, 9, 13-20.
- 裁判所 (2017). 婚姻関係事件数 申立ての動機別申立人別 全家庭裁判所 <https://www.courts.go.jp/app/files/toukei/024/010024.pdf> (2022年11月25日)
- 高橋 あかね (2019). 「親との別れ」からの心理的な経過に関する検討 日本心理学会第83回大会発表論文集, 370.
- 武田 明子・奈良 雅之 (2015). 両親の離婚経験が青年男女の心理的well-beingに与える影響——体験時の年齢や性別, 生活環境要因の検討—— 日本心理学会第79回大会発表論文集, 1034.
- 棚瀬 一代 (2004). 離婚の子どもに与える影響——事例検討を通して—— 京都女子大学現代社会研究, 6, 19-37.
- 曾山 いづみ (2018). 離婚家庭に対する心理的支援の現状調査 日本心理学会大会発表論文集, 82, 388.
- 山田 みき・岡本 祐子 (2007). 「個」と「関係性」からみた青年期のアイデンティティと対人関係上の困難との関連 広島大学心理学研究, 7, 159-171.

Causes of abandonment anxiety experienced by children due to parental divorce

Ryo Miyake and Hidenori Tanaka

Abstract:

The purpose of this study was to examine abandonment anxiety in children due to their parents' divorce. We hypothesized that the following factors cause children to perceive their parents' divorce as an abandonment experience: lack of explanation about the divorce, lack of visitation from the estranged parent, and lack of interaction with the parent living together with the children. In addition, we hypothesized that when the children viewed the divorce as abandonment, it would affect their anxiety about being abandoned later in life. Based on these assumptions, we created a model diagram for the relationship between "Explanation of Divorce from Parents or Either Parent," "Visitation with Estranged Parent after Divorce," "Interaction the Parent Living Together after Divorce," "Acceptance of Divorce as an Abandonment Experience," and "Current Abandonment Anxiety" and administered a questionnaire to 213 undergraduate students, 34 of whom experienced parental divorce. The results of covariance structure analysis showed that the model was compatible with the questionnaire results. The questionnaire also included an open-ended response section which asked the respondents about their feelings about their parents' divorce from the time of the divorce to the present. The responses of 29 students were analyzed using M-GTA. The results suggested that the children recovered from the shock of their parents' divorce and the children's attitude toward the divorce gradually improved as a result of emotional support from both parents, grandparents, and relatives. In addition, reflecting on their own feelings at the time of their parents' divorce in their answers to the open-ended questions appeared to have had a positive effect on the respondents. Forming the responses helped them to sort out ambiguous feelings and become aware of feelings that they had not been aware of before.

Key words: parents' divorce, abandonment anxiety, emotional support